

令和2年3月号

◆八木健 選 ～戸恒東人の滑稽俳句①～

戸恒東人は、「春月」主宰で、俳人協会理事長もされた著名な俳人である。俳壇の重鎮が軽々つくる滑稽句を鑑賞してみよう。

背負ひ子の反り身重たし探梅行

探梅をするに子をおんぶしての一句。「反り身重たし」が一句を支配してよろしいですなあ。まだ歩けないから背負ったのだろうが探梅に身が入らぬ。ましてや背なの子が気になって句を詠む余裕もない可笑しさ。

てにをはを省き物言ふ残暑かな

残暑のなんとも言えない暑さや疲れをどう表現するか。これまでさまざまに詠まれてはいるが、「てにをはを省く」でなんとも言えなさが表現された。

渦潮の巻きをゆるめて阿波の秋

鳴門の渦の巻きようが季節によって変わるかのかどうかは知らない。しかし、俳句には科学的真実は必要ない。読者が納得できることが一番重要である。事実よりも、本当のような嘘、ありそうな嘘の方に詩があるなら、その嘘の方が文芸としての価値は高いのである。

こころざし一誌一代獺祭忌

獺祭忌は、九月十九日、子規の忌日である。俳誌「ホトトギス」は、明治三十（一八九七）年に創刊され、百二十年以上休む事なく刊行され続けている月刊誌である。一方、「一誌一代」として、優秀な後継者の有無にかかわらず、主宰が変わる時に俳誌を閉じる結社もある。どちらも覚悟と努力のいることである。

石投げて水驚かす秋の暮

秋の暮れは「暮れ早し」である。少年はほとんど闇に近い水面に石を投げた。水音が思いがけず大きく感じた。「水驚かす」の擬人化表現で面白い句となった。

名を言へば生国間はれ水温む

この句の「名」とは苗字である。日本人の苗字の数は十万とも三十万ともいわれる。苗字はもともと地名に由来があるため、同じ姓の人が特定の地域に多いことがある。名乗った人、尋ねた人が同郷だったのだろう。「水温む」の季語がその場の雰囲気醸し出している。

首尾一貫骨美しく桜鯛

桜鯛を骨だけ残して平らげたというだけの句である。ところが、「骨美しく」として華麗な景になった。文芸の魔術である。「首尾一貫」も簡潔にその景を表現して見事。桜鯛だからいいね。これが秋刀魚や鯛だと様にならない。

父ほどは漕げぬ自転車麦の秋

父との思い出ですね。いいなあ。そういえば、最後に自転車に乗ったのは、もういつのことだったか。鉄の塊みたいな旧式のやつをそれも三角乗りだった。倒れても起こせないほどのやつだった。

もう読まぬ本を間引ける夜長かな

本に限らずまだ使えるものを処分するというのは罪悪感がある。「断捨離の決断力の夜長かな」となりがち。この句の場合、「もう読まぬ」ことがはっきりしている分、気分は軽い。「間引く」の表現もいい。

指先で闇を捏ねゆき阿波踊

阿波踊りの写生句に「指先で闇を捏ねる」とは初めて見る表現である。「捏ねる」はごく普通の言葉だが、普通の言葉が組み合わせの妙で全く独創的な表現に変身するというお手本。「阿波踊捏ねたる闇のやはらかや」ですな。

人呼べば牛が応へて霧の牧

よろしい風景ですね。説明不要の滑稽な風景である。計算や予想を超えたことが起こるのが人生。外にも出かけ、人にも話しかけてみるもんだね。

掌ではかる今朝の伸びしろ長茄子

何をしたのかを書いて作者の気持ちを描くことができる。「掌ではかる」が行為である。「今朝の伸びしろ」に期待感と充足感が表現された。そしてこの

句の値打ちはどこにあるのか。「掌ではかる」「伸びしろ」のアバウトなところにある。滑稽は日常の中にうようよとあるが、それを捕まえられるかどうか。

村芝居仇に台詞教へらる

芝居の山場であろう。忘れた台詞を教えてくれたのが仇役の人。そこが滑稽である。「覚悟はよいな。 覚えがあろう」「かたじけない。台詞を忘れてしまった」「なななんと。それが一番困るんだよ」。

千枚漬人の舌にも表裏

滑稽句の特徴の一つに人間臭さがある。臭みを溢れさせ過ぎると川柳の領域になるが、一步手前で踏みとどまるのがコツ。この句では「表裏」として、二枚舌とも、本音と建前とも。千枚漬との取り合せがいいね。一句詠もう。「表裏を使ひ一枚でも二枚舌」。完全な川柳になってしまった。